

異種金属を活用した、 流体活性理論と装置作り

気工師 ますてい著
2024年4月24日 第一版発行

目次

はじめに	2
基本理論篇	3
カプカプの作り方	13
カプカプの利用方法	22
利用者のご感想	24
まとめ	25

はじめに

環境汚染、健康不調は何故起こるのでしょうか？

どうしたら、解決できるのでしょうか？

「汚染」とは何か、「不調」とは何か、これらを根本から見直すことで、一つの解決の可能性を見出しました。

氣功師のますていと申します。氣による施術のみならず、氣の原理を応用した、空気や水などを改善する日用雑貨の開発・作製も行っております。そのため、氣「工」師と名乗っております。

各雑貨のご購入者様からは、「瞬時に水の味や舌触りが変化した」「体調が改善した」などと、驚きの声を頂戴しています。

古来より「依法不依人」と申しますが、これは、私の開発力が偉いのではなく、私が利用している法則が素晴らしいのです。

本書では、その日用雑貨の一例である流体活性装置、通称「カプカプ」の作成方法とその原理について、物質面に焦点を当てながら公開いたします。

なお、基本的に私が「開発」した製品は作り方を公開し、特許出願は致しません。

なぜ、特許を取らず、公開するのでしょうか？

それは、世界中で行き過ぎたマネーゲームが、汚染・不調の最大の原因と認識しているからです。

このゲームに積極的に参加した人類文明は、今や地球を何度破壊しても飽きたらないほどになってしまいました。森は切り開かれ、大気や水は汚染され、人のみならず、動植物には奇形が頻発しています。

私たちは方向転換をする時なのです。

開発物というものは、製法を不特定多数に公開した以上は、誰人も特許を取ることはできません。「新規性」がなくなるからです。

過剰なマネーゲームから距離を取り、よりよく生きるために、どんどんと皆で作って、活用を広げていってください。もちろん、作ったものを販売されるのも、作り方を講座や教室としてレクチャーされるのも自由です。

真意が共鳴される仲間と出会えることを、心から楽しみにしています。

氣工師 ますてい

基本理論篇

1 根本法則

ものごとには法則があります。

私たちがそれに気づくことを「発見」といい、産業的に活用し始めますと「発明」と言います。法則を発見した人や応用して発明品を生み出した人が優秀だったことは、疑いの余地はありません。

ですが、法則を「創出」した人は、歴史上皆無です。その意味で、私たちは法則の利用者であって、だれ人も偉いわけではありません。

皆が、宇宙の力＝法則をお借りしている存在に過ぎません。

故に「依法不依人」なのです。前半は原理・法則をお伝えするにあたり、抽象的な話が続きます。

この世を貫く、唯一の法則があります。

端的に形容すれば、それは「ゼロ（0）＝無限（ ∞ ）の法則」と言えます。万象は、プラスマイナスの極性（性質）を持ち、 ± 0 で安定・飽和すべく影響し合う、というものです。

以後、特段の指定がない限り、この安定飽和した「 \pm （プラスマイナス）0」のことを、「0」と表記いたします。

少し詳しく述べますと、次のようになります。

- 1 0はあらゆる潜在性を内包する、万象の発生点であり帰結点である。
- 2 万象はプラスとマイナスの極性（性質・側面）をもち、対発生する。
- 3 プラスとマイナスは中央値＝0で安定飽和を目指し影響しあう。
- 4 同じ極性同士は影響を及ぼし合わない時点まで反発し合う。
- 5 0が生じた時点からは、新たな現象変化の原動力が発生する。
- 6 発生した原動力は、プラス極性へと入り、プラスがマイナスの極性を引き寄せる。

というものです。

詳細は別著に譲りますが、これが全宇宙を貫く法則で、宇宙は0を目指します。

「プラスマイナス」を、「陽一陰」と言ったり、「N-S」と言ったりします。どちらの極性もいずれ必ず、0となるべく、対となる性質を目指します。極性とは対をなす万象の性質の差を示すものであり、どちらが良い悪い、というものではありません。

この「0を目指す働き」を、中和と言ったり、中性化と言ったり、安定化、統合、調和と言ったりします。和して差を取るのが、万象の原理です。

生物単体で見た場合、個体の本来ある状態（=0）を維持する能力として現れ、これをホメオスタシス（恒常性維持機能）と言います。

0には何もないのではなく、すべてのポテンシャルがあります。

ですから「0=無限（ ∞ ）」と言います。

0に進む（あるいは戻す）ための経緯や方法論は無数にありますが、最後は必ず0に成ります。

この時に、中間時点=0から生じる何かが、大なり小なりの生命現象をもたらしています。

ここではその何かを、「ゼロエネルギー」「空気」と呼んでいきます（一般に言う、「空気」——窒素約79%、酸素約21%の気体群とは分けていきます）。

空気が働きかけることで、万物は存在を維持し、空気の移動によって動き、変化しています。

この空気そのものは、通常は五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）で実感ができません。私たちはこの何か——「空気（またはゼロエネルギー）」の働きかけた何らかの「変化の結果」を現象として五感で捉え、その現象に何かと名前をつけているのです。

私たちが住む世界では、完全無縁で独立したものなど存在せず、多種多様な物質や生命との間で、つまり、絡み合ったプラスとマイナスの性質作用の中で、生命活動が存在します。関連する2点の中間時点で、0が生み出され、空気が発生し、万象が変遷し続けています。

2 極性とは何か

プラス極性とマイナス極性とは、中心0から観た「差」を示す尺度です。ある観測点（2点間）においてに差があるとき、私たちは極性を認識することができます、それぞれに相対する性質を見出すことができます。

プラス極性、マイナス極性、0とは、次のように現れ、また表現できます。

- ・ プラス極性：能動性、方向性を示す働き、運動性、波、吸引力、増加性、分離性、プラスイオン、陽子、男性性。

- ・ マイナス極性：受動性、固定しようとする働き、物質性、粒子、放出性、減少性、女性性、分解性マイナスイオン、電子。

- ・ 0：起点、結果、存在、調和性、融合性、中性、それらを可能にする潜在的原動力。

極性の差は、温度差、振動圧差、電位差、電圧差、気圧差、男女差、方位差（上下左右、東西南北）、意識の差などがあります。

あらゆるモノ・コトは差があるため、極性を持ちます。

対向するプラスーマイナスの極性の中央（0）から、空気が発生します。

空気は、プラス極性の高い方へと流れ変化を起こします。

空気は、より微細なプラスとマイナスの極性を潜在的に持っているとも言えます。そのため、空気はプラス極へ流れる（引き付けられる）とともにマイナス極を引きつけ、マイナス極からすれば空気は送り出されるよう動きます。

そしてマイナス極性のものは、相対するプラス極性のものに引きつけるように動きます。そしてプラス極性とマイナス極性が調和・融合され、あらたに0が生じます。

生活レベルでの例として洗濯を解説してみます。

洗濯をしようと思った（プラス極性）から、寝ていた体（マイナス極性）が動き（空気が入る）、汚れた衣類（マイナス極性）が洗われ（＝運動を得る、プラス極性に引っ張られ中和される）、一定の洗濯意欲を達成した結果（0）、きれいになった衣類が生まれる（0）のです。

衣類があり、肉体があり、ついでに洗濯機があっても、きれいな衣類はできません。それら自体では何も起こらないのです。（汚れた洗濯はさらに空気が抜けていきますので、汚れは一層固定化され落としにくくなります）

それらを動かす意図があり、洗濯汚れを落とす運動があり、それらが中和されて（達成されて0になり）、綺麗な衣類という結果が出てきます。

汚れを落とすとは、空気を入れて中和することなのです。

いずれにしましても、極性がバランスし「0」となるところから、空気が生じます。そして、生じた空気は、プラス側へと流れ込んでいき、再び「0」を目指します。

この、「0ープラス極ー0ーマイナス極ー0・・・」を連鎖するのが、生命の実態で、万物を貫く「0の法則」です。

3次元で生命活動を営む私たちにとっては、この0の法則、空気をいかに扱うかが、至上命題と言えます。空気が入ると、生命（肉体）は躍動發展しますが、空気が抜ければ肉体が崩壊に向かいます。0が最も安定します。ですが、現代人の大半は意識の上でも暮らし方の上でも、マイナス極性寄り——空気が少ない状態で生活しています。

空気に包まれるか、空気を発生させるか、いずれにせよ空気を吸引し、バランスする必要があります。

すでに自然界で発生している空気の中へ入ることは、容易に想像がつくと思います。いわゆるゼロ磁場とされる場所は、その代表例です。

私たちの体も、中性状態=0がベストコンディションで、常に0を目指そうとしております。空気が発生している環境に身を置くと、不具合を起こしている偏りを整えることができます。

本著で課題としたいのは、空気を人工的に発生させる場合です。

これは無数に選択肢があり、法則を知らずとも結果的に法則通りのものを作り、利用している場合も少なくありません。

本著でご紹介する「カプカプ」は、装置内で最大の空気を発生させます。装置のの中央（および周囲）を通過するものに空気を入れ込み、通過するものを中和に近づけ、結果活性化するものです。

3 物質の変化とは

個々の物質や生命現象というものは、この「プラスー0ーマイナス」の間を行き来しています。

個体内外の関係性において、 ± 0 の状態が、最も安定・発展する状態です。全ての生命現象は、この0を目指します。

この往来で、性質が移り変わることが、物質・現象の変化です。

プラスの極性を帯びている物質は、相対的に極性の低い外環境から、空気（ゼロエネルギー）を取り込みます。

空気を取り込むと、存在を発展させ、分離・活性化します。粒子や振動が細くなるよう変化します。

プラスの極性が高まるほど、空気を引き込む作用も強くなります。より強いマイナスの極性を引きつけ、0を目指します。

反対に、マイナスの極性を帯びると、空気を放出する（送り出す）性質を持つようになります。空気が抜けるほどに、対象物は運動量が減り、固体化・分解していきます。

マイナスの極性に傾くほど、空気を送り出します。より強いプラス極性と作用し、0になろうとします。

個体・液体・気体というモノの様相の変化は、一定の環境下における、このプラスー0ーマイナスの影響で、空気の移動によるものです。

事物は、外界から空気を取り込むほど気体化し、分離・発展していき、空気の含有が少なくなるほど固体化し、硬直・分解していきます。その中間あたりでは、液体の様相を示します。

躍動し生命力を感じるものは、空気を取り込んでいる途中の状態のもの、あるいは空気を発生させている状態のものといえ、固体化した物質とは空気が抜けた（少ない）状態、現象の一つの終着点と言えます。その意味で、物質それ自体は、さほどの重要ではありません。

その物質が一定の自然環境下において、空気を取り込んでいるのか、空気を発生させる条件を持っているのか、が重要です。

よく「湧き水は滑らかで美味しい」などと形容されます。

これは、自然界が生み出す（美味しいと感じる）湧き水が、「0の法則」をそのまま体現し、中性寄りであるからです。

同じ水でも、美味しく感じたり、不味く感じたりするのは、水に存在して作用している何かによって、水に含まれる空気の度合いが違うからです。

原因は、空気の量です。

念のため、「空気」ではありません。空気、特に酸素の溶存量は、空気（ゼロエネルギー）の働きかけの結果です。空気が入ると、水のクラスターが小さく（細かく）なります。すると、分子と分子の間に空気を溜め込みやすくなります。

4 汚染とは何か

では、「汚染」とはどういう状態を意味するのでしょうか？

汚染物質が蔓延した状態、極端に酸化した状態、腐敗した状態・・・、いずれも間違い無いのですが、この本質は、特定の場や物質が、プラスまたはマイナスの極性に傾いたままで、特定の生物の安定した生存（±0）を著しく脅かす状態を意味します。

万物の、最も安定調和した状態は±0です。

この0を、極端に逸脱したままの状態を、汚染と言います。

同じ状況が人体や生物に当て嵌まった場合、「不調」となり生命を脅かします。

決して別物ではありません。

環境や人体にネガティブなものは、空気を極端に外へと放出してしまう性質（強いマイナス極性）か、空気を外から極端に奪って来ざるを得ないもの（強いプラス極性）を持ちます。

0を逸脱したままの状態でいると、環境汚染・生物の不調が起こります。

皮肉なことに現在人類が「発明」したものの多く——精製され製造されたものや化学物質や、重金属などは、特にこの性質を持ちます。

酸性雨、水道にみる水質汚染を例にとりますと、いずれも極端に酸性です。プラスーマイナスの極性で見るとこれらいずれも極端にプラス寄りです。

これらは中和されるべく（0になるべく）周囲環境から空気を奪います。

酸性雨が森林を枯らすのは、天然では±0に整うべき雨（水は本来中性です）が、窒素酸化物などに空気を奪われ酸性化し、中和されずに降り注ぐことで、雨が触れた樹木などから、さらに空気を奪うからです。同様にして、土中や河川でも空気を奪います。0の法則が働くからです。

（もちろん、地域によって自然界でも火山灰等を含んだりいたしますが）

水道水が不味く感じられるのは、例外なく使用されているものがカルキ（次亜塩素酸カルシウム、次亜塩素酸ナトリウムなど）で、強酸性だからです。日本では蛇口をひねるまで、カルキが一定量残存するよう法律で定められています。

これは、いずれかの水源から水を取る際に含まれる、私たちにとって病原体となるもの、微生物やその代謝物を壊すためです。

カルキが病原体を破壊するのは、病原体から空気を奪うためです。カルキも、法則から見れば、病原体（腐敗を運ぶアルカリ性＝マイナス極性のもの）を壊すために、対極であるプラス極性＝酸性の薬剤を使い、中和しようとした、ということです。カルキの良し悪しは別として、法則は働いています。

とともに、0の法則でカルキが中和されるためには、周囲環境である水・水道管からも、さらに空気を奪います。

水道管（多くは鋳鉄ですが鉛を使っているところも残っています）も0の法則に従い、空気を奪われ、サビが発生します。

蛇口からはカルキの殺菌作用の残った空気を失った「酸欠状態」のような水が出てきます。重金属も溶け出しています。これを飲めば、常在菌を破壊するのはもちろんですが、カルキや水が中和されるために、体内で0の法則が働きます。水やカルキが外環境である人体（や生理活動）から、空気を奪うのです。結果、たとえば体の特定の箇所に過剰となった電子を貯めてプラスマイナスを保とうとしたり（腫瘍化）、失った空気を取り戻そうと血液が酸性に偏ります。異常は多様ですが、体が傾きを修正すべく0の法則が働いた結果です。0を保とうとするのです。

だから水道水は美味しくなく、人体にも悪影響を及ぼすのです。

もっとも、そもそも論として、浄水で利用している水の大半が地表に止まっている水（池、湖、ダムなど）です。地表で滞っている水は、0の法則で、よりプラス極性の高い大気の方へ空気を放出していきます。

ため水は腐敗しやすく、病原体も発生しやすい水なのです。

そのため、人はもちろん、多くの動植物や地球環境全体にとって良い状態の水を生むには、極端なプラスマイナスを中和して0にすれば良いのです。そのためには、まずは現代の過度に空気を奪うものや状態は減らし、反対に空気を発生させる条件を増やせば良いのです。

森林を取り戻そう、山河を蘇生させよう、に尽きるのですが、法則を使ってさえいけば、空気の増加に多少なりとも貢献できる装置・文明づくりできます。

空気が入ると、物事は中和（0）に向かい、安定します。

「汚染」は中和され、環境は自然かつ生命力のあるサイクルに戻ります。

5 金属の性質と特徴

私の「カプカプ」では、2種類の金属を使います。

空気は対向する極性に差があるとき、その中間で生じ、2極間の、プラス極性の方へと流れていきます。

であるならば、解決したい問題点の周囲に、意図的に対向する2つの極性を用意し、0を発生させれば良いのです。

金属が2種類存在すると、さまざまな「差」が生じます。

電位差は最も金属を象徴する「差」です。電位差があるものが水などを媒介にしてつながると、電流が生じます。これも0の法則です。

理屈上は、電位差があれば組み合わせは何でも良いことになります。電位差が大きいほど流れる電流は大きくなります。

発生するゼロエネルギーも大きくなります。

今回は、2種の素材は銅とアルミニウムでお伝えいたします。

この理由は2つあり、いちばんの理由は、銅とアルミニウムは、入手しやすく加工がしやすいからです。もう一つは、「カプカプ」は水周りで使うことを想定していますので、錆びにくいことを重視しています。

私自身が製作販売する雑貨は、別の金属を使います。

これはさらに、金属自体の環境負荷と毒性を配慮してのことです。

アルミニウムは、生成段階での環境汚染の負荷が高く、水や土に溶け出した際の金属毒性があります。それ自体は、人にも環境にも、あまり良いものではありません。ただ、入手しやすさと、加工のしやすさは圧倒的です。

銅はそれ単独で、直接触れた有機物の分解作用や酸化還元作用を持ちます。

水道水を表面積の広い銅（繊維が細かいほどよい）につけておくと、カルキが分解できます。雨水が溜まっても、そこに銅線を入れておくと、ボウフラもわかなくなります。

こうした理由から、入手しやすさと扱いやすさも合わせ、アルミニウムと銅の組み合わせが手頃になります。

入手しやすいものでは、スチール線、ステンレス線もありますが、スチールは錆びやすく、ステンレスは他のものから空気を奪う作用が過度に高いので、半ば直感的にですが、現在のところ使用しません。

ともあれ、この2つの金属の電位の影響が0になるところから、空気が発生します。

万物は、その単独の個体内にもプラスとマイナスの極性を持ちます。樹木も、上下で極性が変わります。

金属も、針金の形状にしましても、成形される段階で必ずどちらかに微細ですがプラス極・マイナス極ができます。

プラス極—————（針金）—————マイナス極

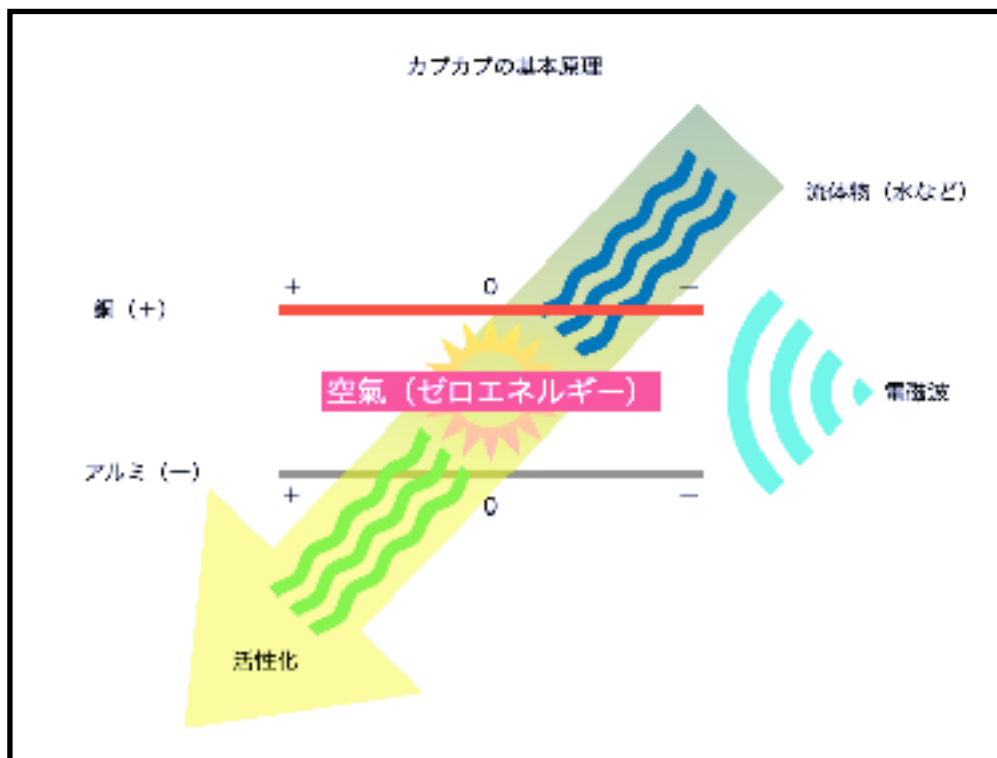
といった具合です。どちらがプラスでマイナスかの判別は難しいですが、必ず両極が生じます。

また金属は一定の電磁波を吸着し、自由電子が移動することで微弱ながら電気を帯びます。線のどちらかに向かって微弱電流が生じます。

2つの金属線を使うことで、それぞれに発生する電圧の差、電流の方向の差、電位差を作ることができます。

つまり、1本の針金にプラスとマイナスがあり、異なる金属間にもプラスとマイナスがあるということです。この2種類の金属線の中心を捉えると、そこに0が生まれ、空気が発生します。この空気を掴むと、つまり中心を通過したものは、空気を受けて中性化・活性化します。

これが基本的なカプカプの原理です。



カプカプの作り方

<カプカプの材料>

- ・ 銅線0.5ミリ～0.7ミリ径
- ・ アルミニウム線1.0ミリ径
——各適量（後述）

- ・ ケーブルクリップ x1つ
- ・ グルーガンおよび
グルースティック
（接着剤） . . . 適量



<作業工具>

カッターナイフまたはデザインナイフ、ニッパー、ペンチ（先が細かいもの、平たいもの2種類あると良い）、定規、カッターマット、ピンバイスドリル（2ミリ）もあると良い。

作業工具や接着剤は、ご自身の実際の作業に応じて変更なさっていただいて構いません。

今回ご紹介する材料は、2024年3月時点で日本の100円均一（ダイソーさん）で全て揃います。ケーブルクリップの形状は、今のところダイソーさんが販売しているものが最も都合が良いため、採用します。

原理さえ正しければ、どのようなクリップに施工しても大丈夫です。

銅線とアルミニウム線の長さとお数は、1つのクリップの奥行き幅と、そこに後述しますアンテナを何組入れるかによります。

銅とアルミニウムの線は、3組か6組できあがる量がお勧めです。

施工する中で、隣り合う金属線の組み合わせと、対角線上に向き合う組み合わせが、すべてプラスマイナスとなるからです。

銅がプラス極性、アルミニウムがマイナス極性です。

1 クリップの内パーツを処理する

*この作業は、実際に施行される素材に応じて変更なさってください
材料に提示していますクリップの、
内側のパーツを取り外します。

作成例では外が白、内が黒なので、
説明時は色で指示することにします。

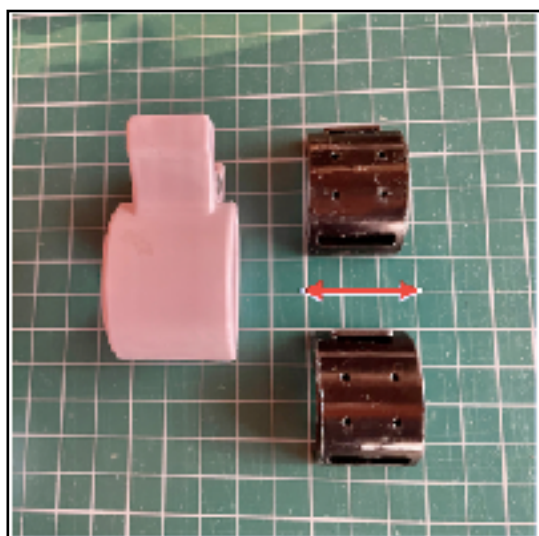
取り外した内側の黒いパーツの穴
が、裏表いずれかに開いているか確認
します。もし開いていなければ、ピンバ
イスドリル等で、直径2～3ミリ程度
の穴を空けます。

理想的には、向き合う穴のいずれか
の縁から、概ね対角線上になる位置に1箇所開けます。



2 ハリガネを切り出す。

定規でケーブルクリップの内パーツの奥行き幅を測ります（赤矢印）。



この長さの2倍の長さのアルミ線、銅線
を3対切り出します。

1本あたりの長さは前後して構いませんが、
全ての線の長さをなるべく揃える
よう、心がけてください。（3センチな
ら、全て3センチで切り出します）。

測定したところ、パーツの奥行きは2.5
センチでした。

ですからこの2倍、5センチの銅線と
アルミ線を切り出します。（下の画像）

先ほどから、「概ね」「なるべく」といった表現があります。以後も頻繁に出て参ります。

通常なら、正確無比に長さや重さを測るべきと思われるでしょう。

ですが、正確無比は目指さなくて構いません。

第一に、ナノ単位、ピコ単位・・・と想定すれば、

そんな正確無比な計測は不可能だからです。目視できる範囲でも、既にハリガネは歪んでおります。

第二に、というより本来はこちらが第一義ですが、そのような正確さは必要ないからです。結果が全てと申しますが、長さが多少ずれていたり、垂直直角がずれていたところで、法則はちゃんと機能します。

なぜかは別著に譲りますが、正確無比を目指すあまり、作者の意識が強張ることのほうが問題です。

ともあれ、切り出したハリガネは次のような極性になります。

プラス—————0—————マイナス

銅線は銅線で、アルミ線はアルミ線で、プラスとマイナスの極性を持ち、中心から離れるほど、極性は高まります。どちらがプラスかマイナスかは、実感できる方は少ないでしょう。極性の方向を掌握することは、それほどここでは重要ではありません。極性が生まれることを理解しておくことが肝要です。

2 アンテナを作る。

次に、各ハリガネを加工していきます。この工程が、ある意味で一番大切になります。

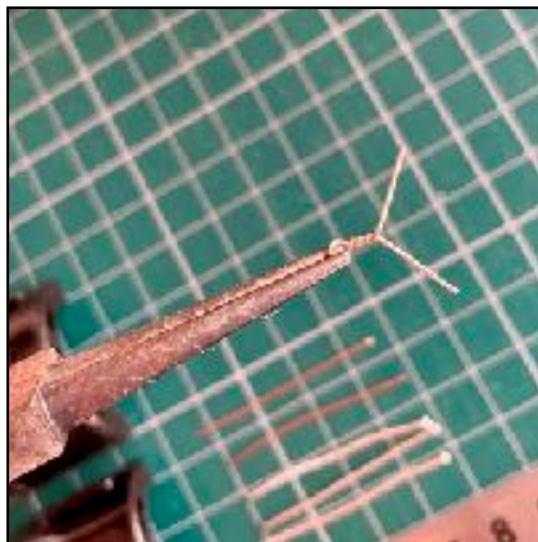


切り出したハリガネを、中央でつまみ、半分に折ります。それを時計回りで丁寧にねじっていきます。反時計回りでも構いませんが、全てのハリガネの回転方向は揃えてください。

中央を先の細いペンチでつまみ、両端を平たいペンチで挟んで振ると綺麗にできます。



→



中央（0）でつまみ、曲げ、丁寧にねじると、右の図のようになります。これを先端まで行います。素手でもねじれますが、あくまでハリガネですので、怪我をしないようお気をつけください。先端までねじると、次のようになります。



3 アンテナの特性

これを本著ではアンテナと呼びます。

このアンテナは、ねじった際の向かい合った点の中央の空間で、極性間の和が等しくなり、差がなくなります。

螺旋を描く金属の中央（下の図の赤い線）で空気が発生します。

アンテナの開いている部分、プラスとマイナスの先端側はなくなったわけではなく、そのままの性質で機能します。

アンテナの開いている先端側（右下）へ行くほど、極性は高くなり、同時に、0に進もうとする作用が強くなります。

これは、金属内の0地点——折り曲げた際の中央（画像左上）が最もゼロエネルギー（空気）が高い点だからです。

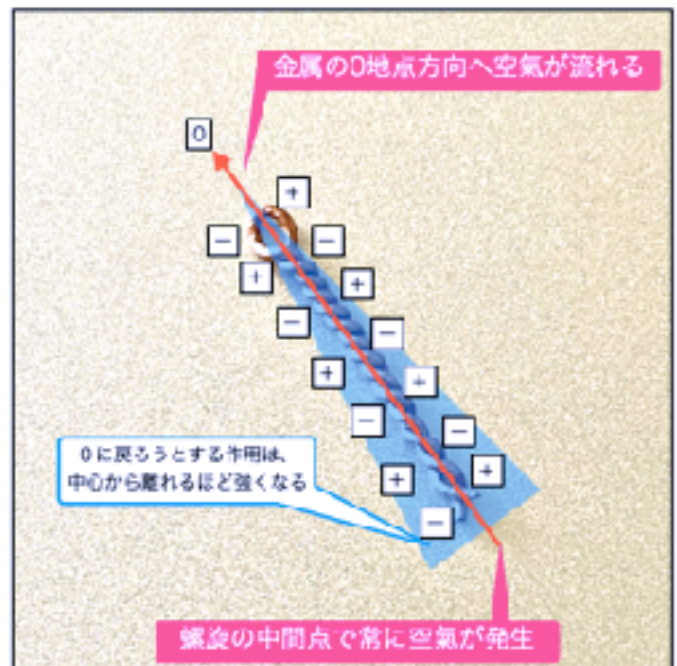
空気は、左上と右下とで、差が生じることになります。

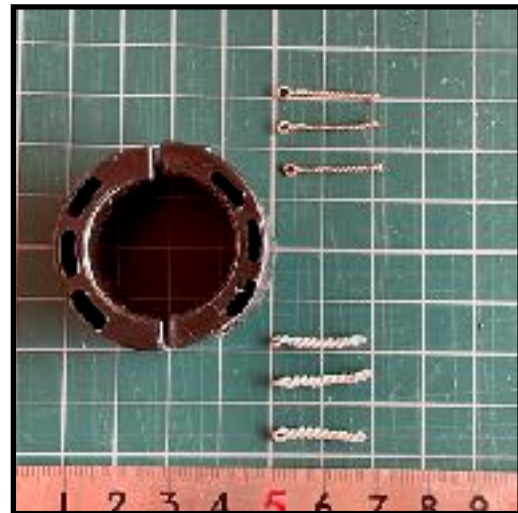
空気は2点間の、作用の低い方から高い方へ流れていきます。

そのため、向かい合った点の中央の空間で空気が発生しつつ、右下の先端から左上の0地点の方へ進もうと、空気が作用し、全体としてはプラスーマイナスの先端側（画像では右下）から、中央（左上のリングのような部分）へ、空気の流れが生じます。

リング状になっている左上が新たなプラス極、右下はマイナス極のように働くということです。

少し長くなりましたが、このアンテナのようなものを異種金属で3対作ります。





出来上がりは上の図のような具合になります。

ねじりますので、下の長さの半分より、若干短くなります。

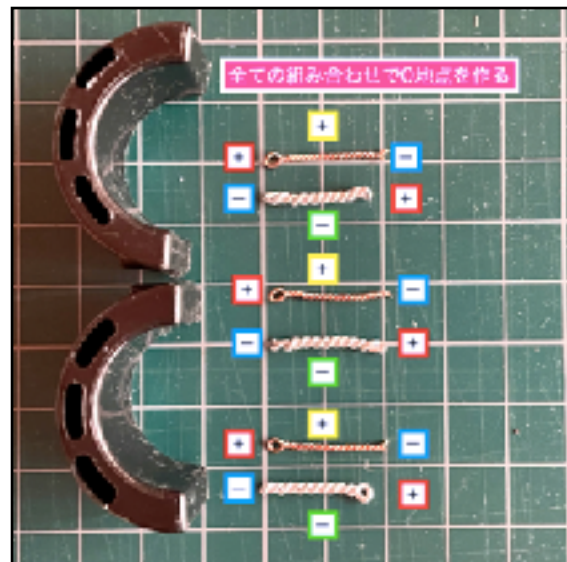
製作例では、5センチのハリガネを半分に折ると約2.5センチ、ねじり終わると約2センチです。クリップのパーツにきちんと収まるサイズになります。

4 アンテナの挿入

出来上がったアンテナを、黒のクリップパーツの穴に入れていきます。

どの穴に入れても構いませんが、穴ごとに、銅のアンテナとアルミのアンテナを、交互かつ、天地逆に入れていきます。（右の図）

こうすることで、「銅ーアルミ」というプラスーマイナスの極性、「1本のアンテナ」が持つプラスーマイナスの極性を、全ての組み合わせと方向で、0にすることができます。



この組み合わせにすることで、クリップの中央の空間に最大限のゼロエネルギーを発生させます。

黒のパーツの穴の片側をグルーでふさぎます。グルーガンとグルーで説明しますのは、これらが扱いやすく、入手しやすいからです。

耐水性のある、金属以外の接着剤なら、何でも構いません。



そして、2種類のアンテナを、交互かつ天地逆に入れてきます。

片側3本のアンテナ、対をなすもう片方のアンテナの位置が、概ね均等になるよう、丁寧に位置を取り、グルーで固めていきます。

削ったグルースティック（右図）を穴に詰めて位置を決め、グルーガンで融着すると安定しやすいです。

全ての穴にアンテナを入れ、固定できたら穴をふさぎます。



4 パーツを組む



グルーが盛り上がった場合は、ナイフ等で削って平らにします。盛り上がったままだと、元あったクリップの白いパーツに収まらなくなります。

大体平らになったら、白いパーツにはめ込んでいきます。

黒いパーツの収まりが悪ければ、グルーの削り直しを繰り返し、何度か調整を行ってください。

白いパーツに黒いパーツが大体収まりましたら、クリップの閉じ具合を確認します。

クリップが閉じ切らない、元の状態より開いている場合は、黒いパーツの収まりが悪い状態です。



グルーが盛り上がっている、または、嵌め込んだ際の圧力不足か不均衡で、白いパーツの所定の位置まで、黒いパーツが収まり切っていない状態です。

グルーの除去とともに、クリップの締め具合を正し、収まりを整えます。

5 仕上げる

もし、黒いパーツの、アンテナを入れた穴に、隙間があるようなら、グルーく盛り直し、微調整を行なっていきます。

「カプカプ」は水回りで使用する前提ですので、アンテナのある空洞へ水がなるべく入らないよう、丁寧にふさいでください。



最後に、表面に残った不要なグルーを丁寧に削り、あるいは溶かし平らにし、仕上げていきます。

これで、完成です。

小さなクリップ等で製作する場合、3対のアンテナを設置できない場合も出てくると思います。

この場合は、銅とアルミのアンテナを天地逆に向けること、アンテナの位置をできるだけ均等にすることを心がけてください。



アンテナの組の数を増やすと、より大きなゼロエネルギーが発生します。ご興味があれば、3対のほか、6対、9対・・・を作って、比較なさってみてください。

カプカプの利用方法

カプカプは、その中心に挟んだ対象に、空気を送り込み、対象の極性の偏りを調整し中性化させるものです。

中心を通過すればゼロの法則が働きますので、個体はもちろん、水や空気、電流や電磁波といった流体物にも影響いたします。

1 水への活用

使用頻度の最も高い、水（水道水）の場合、水道管のいずれかのパイプを挟みます。

上水道の根本に着ければ、家に入る上水を活性化できます。ただ、この場合の水は、家屋の各地へ張り巡らされた水道管（水道管自体、経年によるサビやカルシウムの付着、等）と再び作用しますので、徐々に活性度は下がります。しばらくはかえって汚水が出ます。

空気を活用した上水管の掃除がすすむということです。

出口付近に設置すれば、カプカプの影響（空気の影響）を最も受けた、活性度の高い水を使うことができます。

ただし、カプカプは水道水中の重金属やカルシウム、カルキそのものを濾過して取り除くわけではありません。それらも空気を与えることで、中和方向へ性質を変化させ、毒性を減らしていくことができます。

濾過装置と併用されると、一層よい水を利用できます。

水は空気の影響を顕著に反映します。

空気を受けるほど、水は中性化・活性化し、クラスターが細かくなり、軽く柔らかくなった感じがいたします。

良い水を摂取するだけで、私たちの身体は元気になります。



2 ガスへの活用

水同様、ガスも活性化し、燃焼効率を上げることができます。

ガスの元（プロパンガスならガスボンベ付近のホースなど）に設置しますと、家中のガスの燃費が向上します。

ただし、カップは素材の特性上、熱に脆弱なです。コンロや給湯器といった熱源に近いところでの使用は非常に危険なため、お控えください。

3 電気への活用

コンセントの根本を挟みますと、コンセントと電流が空気の影響を受け活性化します。

電流が導線内をよりスムーズに流れるようになることで、ロスが減り、より効率よく電気を利用することができるようになります。

住宅に流れ込む直流電流は往復しますので、カップを1箇所に設置しますと、家全体の電気利用に影響します。複数設置することで、より高い作用を受けられます。

4 電磁波対策としての活用

電磁波とは、電界と磁界を直角に交互に発生させる、交流の光の波です。

周波数帯によって縦分けて扱われています。非常に幅広い概念であり、本来は万物が電磁波を送受信しているといっても過言ではありません。

光はそれ自体が電磁波ですし、電磁波は光の側面です。

乱暴な言い方をすれば、現象の一面の物差しとも言えます。

ここにも必ず、0の法則が働いています。

私たちが暮らす中では、主に電源や電子機器に電流が発生した際の「電磁波」、携帯電話の基地局から携帯端末まで行き来する「電磁波」を想定します。

カップを通過する電磁波は、空気（一面から見れば、空気も電磁波です）を受け取ることによって周期性（プラス極性とマイナス極性）が整い、振幅・周波数が安定します。通電する以上、電磁波はなくなりませんが、穏やかに感じられるようになっていきます。

電子機器の近くにカップを置いておくと、電磁波由来と思われる疲労感が軽減されます。

また、電磁波の周期性が整えられますので、視聴覚のコンディションとは別にディスプレイや音声が、鮮明になったりいたします。

5 空間の調整

カップの周囲は、空間が清浄に感じられます。空間には、様々な要素が入っています。先程の電磁波や、物質的な範囲だけでも、水蒸気（水）、空気（窒素約79%、酸素約19%の気体群）、微生物・・・が漂っています。

こうした空間の諸要素にゼロエネルギーが干渉することで、空間を中和し、心地よい方向へと変化させます。

利用者のご感想

「活性器（*カップのこと）を受け取りました。
ありがとうございました。
むっちゃ、感じる————！」

「不味すぎた二階の水道水、一瞬で飲んでも気にならないくらいになった。
数万円する別の装置より効果ある」

「コーヒーを煎れるために、蛇口につけて使ってみました。確かに味が変わりました。美味しくなった気がします」

「原因不明の痺れと体の硬直がありました（カップを近づけると）一瞬で流れて強張りがなくなりました。ただ、離してしばらくすると、強張りが戻りました」

「これ、すごいですね。ほんとにエネルギー出てる。すごいです」

*体感には個人差があります。

まとめ

万物万象は、中和・中性・中庸を目指し、変化していきます。この中心0地点から生じる空気（ゼロエネルギー）が全ての原動力です。0地点へ進むと、万物万象は最も安定し健全な状態となります。ひいては、宇宙は常に0を目指します。

カプカプは、空気を意図的に発生させ（呼び込み）、中心を通るものを空気で感化させる装置です。中和させ、見方を変えると活性化いたします。

物質が特に物理次元で変化するまでには、一定量の時間——ゼロエネルギーの感化量が必要ですが、目に見えずとも着々と変化をします。

再度になりますが、「カプカプ」の原理と作り方を公開するのは、行きすぎたマネーゲームを見直し、より豊かな文明を築いていくためです。

現状、オカネはないと非常に苦勞をいたしますが、たとえ欠陥があったとしても、オカネそのものが悪なのではありません。天下万民、オカネを活かしきれない、人類の意識次元が低いのです。

「カプカプ」はどなたでも作れます。ただ、いくら理論や製作法を公開しても、もし受け手（読み手）の意識次元が低ければ、うまく作れません。僭越ながら、私や、私のワークショップを受けられた人々のように「カプカプ」を再現できないでしょう。所有・独占・排他的な意識では、何をやってもうまくいきません。

反対に、意識次元が向上すれば、何を扱っても社会はうまく機能していきます。意識次元の高い方が作られれば、「カプカプ」も、もっと素晴らしいものが作れます。この資料を手にとられた方が、より高い意識を共に育み、生活で有意義に活用されることを願っております。

なお、私に製作を依頼されたい方、ワークショップの開催をご希望の方は、末尾の連絡先までお問い合わせください。

カプカプは1つ12,000円で製作いたします。私が製作する場合は、氣功も併用いたします。複数の場合は割引いたします。

ワークショップは応相談とさせていただきます。

詳しくは、お尋ねくださいませ。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

氣工師ますてい

「異種金属を活用した、流体活性理論と装置作り」

カプカプ製作/本著著者 藤原真斗（気工師ますてい）

2024年4月24日 第一版発行

お問い合わせ先

contact@tenderwisdom.info

公式サイト

<https://tenderwisdom.info/>



メールマガジンのご登録

<https://form.os7.biz/f/a4db4edc/>



Instagram : @masty_lifecreator

